

序 文

耳鼻咽喉科領域には小児疾患が多い。中耳炎、副鼻腔炎、扁桃炎など、どれをとつても外来患者として占める割合は多い。ことに最近では疾患の早期発見、早期治療が叫ばれており、外来を訪れる小児の年齢は低くなつてきている。

小児疾患を扱うときに耳鼻咽喉科領域でありながら、まったく新しい領域の問題として扱わなければならないことがあり、また何か他科領域のような異和感をもつことがある。これは小児科が内科領域で独立して存在し、また小児病院が独立して運営されていることを思うと、われわれ耳鼻咽喉科医自身にも、これら小児疾患を取り扱う場合には、成人領域と異なつた観点に立たねばならないことを教えている。

小児疾患の診断・治療には、小児の生理的な機能を十分に考慮せねばならないが、耳鼻科の専門領域に入つてしまうと、改めて顧みる機会が少ない。われわれは日常診療で、幼児に薬剤を投与するときに、最低必要量を考えるが、多少の不安を感じながら処方したり、手術時の術前術後の管理も、経験に頼る傾向がある。

今回の特集号のねらいは、小児の耳鼻咽喉科を考え直してみようということである。すなわち他科からみた耳鼻咽喉科ということになるであろうか。そうなると境界領域ということになり、原稿が集め難くなる。本特集は小児耳鼻咽喉科を網羅したわけではないが、幸いにして各科の専門の方々にご協力頂けたので、日常診療に大いに役立てて頂き度いと念願する次第である。

編集委員